



夏期講座 卒業生差入れのアイスに喜ぶ、中3、高3生!



8/10 中1、2年生の道コン



8/10 中1生と中2生と一緒に受験



8/11 中3生の道コン 道コンの結果は今後の取組みの目安となります



夏期講座 理解不足を二人に説明



8/17 1年生に英・数の説明授業



終わっていない夏休みの宿題で残される



日々努力は卓球だけではないよね!



いつも差入れをしてくれるJRの浦田君



6期生の岩淵君が舟漕ぎ大会で6位に

【二期期スタート!】
夏期講座も終わって、二期期が始まりました。始まってすぐ中学生は全学年、学力テストがありました。学力テストの結果と道コンの結果を踏まえて一人一人の面談を始めています。
普段、一生懸命やっているつもりでも結果に出せなければ意味がありません。大事なことは結果をどう考えるかです。終わって気を抜くのではなく問題点をしっかり反省し、次のテストに向けて取り組むことが大切です。テストの結果は日ごろの勉強の成果です。結果がよくないということは日ごろの取り組み方に問題があるということです。各教科で、できなかったところ

ろや苦手な単元をしっかりと復習することです。やったつもりや、やっているつもりではダメなことは分かるはず。結果の出る人、成績の向上する人はそこが違います。また、塾の宿題にも積極的に取り組む姿勢が見られます。「やればいいでしょ」では、誰のために、何のためにやっているのか分かりません。当然、結果に出るはずはありません。いつも言っているように「学力の差」は「取り組む意識」の差です。特に中一は、これからどんどん内容が濃くなっていきます。今のうちに今まで学習したところの復習をしっかりとやることです。勉強は毎日コツコツしかありません。自分で「できる」という自信や確信がなければテストではできません。自信があってもミスしてしまうこともあります。だから

一〇〇点を探るのは難しいのです。注意力も大事なポイントです。テストで時間を余してポイントとしていたり、寝ている人がいい点を探れるはずがありません。最後までしっかりと時間を使って問題に取り組む姿勢はとても大切です。
中三生はいよいよ学力A・B・Cテストです。来年の入試も3月4日に決まりました。入試まで6ヶ月、もう志望校を決め、とにかくそこに向かっていくことです。
(写真8月30日午後からのAテスト対策授業)

文科省は25日、小学6年と中学3年を対象に4月に行った全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果を公表した。基礎知識を問うA問題で成果が出た一方、活用力を試すB問題に課題が残るといふ傾向は変わらないが、都道府県別で下位県の成績底上げが顕著になり、学力の地域格差の解消が一層進む結果となった。
都道府県別の平均正答率を見ると、沖縄県が算数Aで昨年の47位から6位に躍進。小学校全教科で10位以上順位を上げ、二〇一二年から強化した授業改善の成果が出た格好となった。
昨年の小学国語A最下位を受け、知事が一部校長名を公表した静岡県も対策問題などに取り組んだ結果、小学校全教科で成績を伸ばした。秋田、福井など上位県に大きな変動はなかった。
なお、北海道は公立小の国語A 71.8(都道府県別36位)、同B 52.9(同43位)、算数A 73.8(同45位)、同B 53.2(同47位)、公立中は国語A 79.4(都道府県別25位)、同B 49.9(同34位)、数学A 66.0(同36位)、同B 50.4(同26位)となっている。
下位3自治体の平均正答率と全国平均との差は全教科で縮小し、中学の数学A、B以外の教科では全国平均を5ポイント以上下回る自治体はゼロだった。「文科省は苦手分野を分析し、他校の良い取り組みを導入するなど、授業改善への努力が底上げにつながった」と分析している。

底上げ進み地域差縮小
学校別成績公表は少数か

文科省は今回から一定の条件で市町村などが学校別の成績を公表することを容認。公表する自治体は少ないとみられるが、同省は「学校の序列化が起きないよう実態を注視したい」としている。

沖繩の小学校で改善目立つ

過去のテストで課題とされた分野では算数Aの四計算や数学Aの関数の問題で改善が見られたが、「資料から得た情報を伝えるように書く」(中学国語B)や「立場を明確にして意見を述べる」(小学国語B)は正答率が低く、故事成語も苦手傾向があった。白紙解答の割合は改善した。

路新聞8月26日より

4月に行った全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果を公表した。基礎知識を問うA問題で成果が出た一方、活用力を試すB問題に課題が残るといふ傾向は変わらないが、都道府県別で下位県の成績底上げが顕著になり、学力の地域格差の解消が一層進む結果となった。
都道府県別の平均正答率を見ると、沖縄県が算数Aで昨年の47位から6位に躍進。小学校全教科で10位以上順位を上げ、二〇一二年から強化した授業改善の成果が出た格好となった。
昨年の小学国語A最下位を受け、知事が一部校長名を公表した静岡県も対策問題などに取り組んだ結果、小学校全教科で成績を伸ばした。秋田、福井など上位県に大きな変動はなかった。
なお、北海道は公立小の国語A 71.8(都道府県別36位)、同B 52.9(同43位)、算数A 73.8(同45位)、同B 53.2(同47位)、公立中は国語A 79.4(都道府県別25位)、同B 49.9(同34位)、数学A 66.0(同36位)、同B 50.4(同26位)となっている。
下位3自治体の平均正答率と全国平均との差は全教科で縮小し、中学の数学A、B以外の教科では全国平均を5ポイント以上下回る自治体はゼロだった。「文科省は苦手分野を分析し、他校の良い取り組みを導入するなど、授業改善への努力が底上げにつながった」と分析している。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月
		休塾					休塾(秋分の日)		休塾					富原定期テスト	休塾(敬老の日)	休塾			中三学力Aテスト				休塾						青陵定期テスト・江南・北陽定期テスト

携帯電話の持込禁止
携帯電話の持込は禁止。連絡は塾の電話を使用して下さい。

9月の予定

『復習の習慣作る家庭学習ノート』・・・秋田の秘密(4) 2014.07.03

「全国学力・学習状況調査」(全国学力テスト)で、秋田県の好結果は各教科の平均正答率だけではない。

家で授業を復習する子どもの割合も毎回高く、2013年度は小学6年生で89%(全国平均51.4%)、中学3年生で82.5%(同48.6%)に上る。

背景にあるのが、家庭学習用のノートの普及だ。

県南東部、横手市立旭小学校で5月下旬、丹尾豊美教諭(42)が担任する3年生の帰りの会で、「家で工夫して書いたお友だちがいます」とB5判のノートに掲げた。開くと、丁寧な字で算数の問題や式、解答が書き込まれていた。「小テストで苦手だったところの復習です。参考にしてください」と呼びかけた。

家庭学習用のノートは、県内の小中学校の一部で40~50年前に使われ始め、全县に広がった。ノートの呼び名は様々だが、学習内容が指定される宿題とは別に、児童生徒が自ら勉強内容を決め、毎日1~2ページを埋めることで共通している。担任らが朝受け取り、その日のうちにコメントを書き込んで返却する。

同小では、2年生後半~3年生頃からノートを使う。上手なノートのコピーを教室に貼り出すなどして、子どもたちのやる気を引き出す。

同小5年の大友豪大君(10)は毎日夕食後、自宅のダイニングテーブルでノートを広げ、漢字と計算の練習問題をしている。漢字の横には読み仮名を書き、読みと形を一緒に覚えるよう工夫。計算問題は解いた後、自分で答え合わせをする。

「全部丸だとうれしい。漢字は苦手だったけど、ノートで練習したらテストで100点が取れるようになった」と大友君。今では「ノートをしないと落ち着かない」。母の真由子さん(43)は「夏休みもお正月もノートに向かうことになっている。家庭学習の習慣がしみこんでいる」と喜ぶ。

同市に隣接する大仙市の市立協和中学校では、ノートの提出先を、曜日によって担任、部活動の顧問、校長・教頭らに替え、全教員で全生徒を指導する。藤本竜伸校長(57)は「教員は自分のクラス以外の生徒にも声をかけやすくなるし、生徒もいろいろな視点からアドバイスをもらえる」と効果を感じている。

県出身で、出版社「主婦の友社」(東京都)の編集者を務める中野明子さんは09年、秋田の家庭学習用のノートを紹介する書籍を出版し、11年には続編「秋田県式家庭学習ノートで勉強しよう!」を発行した。「ノートは自分で勉強内容を考えるので、積極的に学ぶ姿勢や創造力が身につく」と中野さん。関心が高く、続編は6月にも増刷をした。

『探究型授業、教員の高い指導力の成果』・・・秋田の秘密(8) 2014.07.16

秋田県はなぜ、2007年度に始まった全国学力・学習状況調査(全国学力テスト、学テ)で、トップクラスの成績を取め続けてきたのか。今後も維持できるのか。

米田進・県教育長と、県の学テ結果を分析してきた阿部昇・秋田大教授(教科教育学)に聞いた。

子ども主体、学ぶ意欲を育てる...米田進・秋田県教育長

秋田県では、教員が一体となって「分かる授業、できる授業」づくりに取り組んできた。当たり前のことだと思っていたので、07年度の学テで小学校は全教科で全国1位、中学校も1~3位と聞き、驚いた。同時に、「今までやってきたことは正しかった」と自信を持てた。

県内で力を入れてきたのは、子どもに問題意識を持たせ、意見交換をする探究型の授業だ。かつては一方的に教え込む授業が多かったが、県教委が1991年度の指針で「自ら学ぶ意欲と態度の育成」を求めた。

いろいろな人と話し合い、より価値のあるものを生み出すことは、社会で生きていくうえで必要な力。子どもの時からのトレーニングが大事で、授業で話し合い、考え、問いを発する力を伸ばしたい。

学テの成績の分布を見ると、極端にできない子はいないが、上位層が薄い。経済的に困難な状況もあり、大学進学率が全国平均より低い。高校での授業力向上も図り、16年3月までに現役で東大15人(14年3月6人)、東北大130人(同103人)、医学部40人(同37人)合格という目標を掲げている。

多くの児童生徒が義務教育段階の学習内容を習得している。ただ、学テで測るのは、あくまで、小6、中3時点の学力。子どもたちには、現状に満足せず、より高い目標に向かって学び続けてほしいと思っている。

チームティーチング、優れた授業方法を広める...阿部昇・秋田大教授

秋田県は学テで、応用力に関するB問題の成績が特に良い。質問に全く答えられない無回答率は、全問題で全国平均を下回っている。

好成績を支えるのは、教員の指導力の高さだ。全教員が必ず年に1回は研究授業をして他の教員と意見を交換するほか、チームティーチングを実施し、優れた

授業方法を広げている。

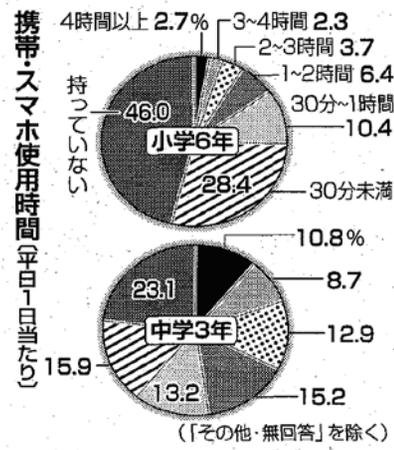
授業の目標である「めあて」の提示→探究型の学習→振り返りという授業スタイルは、「秋田型」と呼ばれる。学習ルールの徹底で、子どもは授業に集中できる。褒めて可能性を引き出す授業作りも効果的だ。

学テの「質問紙調査」では、結果を保護者や地域に説明した学校数の割合が全国平均より高く、「早寝、早起き、朝ごはん」の子どもも多い。学校と家庭・地域のつながりも、前向きな学習態度につながっている。

最大の課題は5年後から、教員が急速な世代交代を迎えることだ。優れた教育を継承できるかは、ベテランと若い世代の連携にかかっている。

(この連載は石井正博、山田睦子が担当しました) YOMIURI ONLINE より

スマホ「1日4時間超え」学力テスト 小6も半数以上使用



小学3年生の半数近くが1日1時間以上

携帯電話やスマートフォンでメールやネットをし、4時間以上費やす生徒も1割を超える。文部科学省が学力テストと併せて行う児童生徒へのアンケート調査では、今回初めてスマホなどの平日の使用時間を尋ね、生活のかなりの時間を割いている実態が浮き彫りになった。

小学6年生の半数以上が携帯やスマホを使用していることも判明。学力テストの平均正答率と比較すると、小中全教科で、使用時間が増えるほど成績が低下する

傾向が見られた。専門家は「一定のルールを決めないといけない。待たなしの状況だ」と警鐘を鳴らす。

スマホなどを「持っていない」と回答したのは、小6で46.0%、中3は23.1%。一方、使用する児童生徒のうち、平日に1日1時間以上使う割合は小6では15.1%だったが、中3では47.6%に達し、4時間以上はそれぞれ2.7%、10.8%に上った。

テレビゲームをする時間も良くなっており1時間以上は小6で前年度比1.7ポイント増の54.4%、中3で同8.4ポイント増の55.9%。スマホ向けゲームの普及が影響したとみられている。携帯やスマホの使用時間が30分未満の児童生徒と、4時間以上の児童生徒の正答率を比べたところ、全科目平均で約14ポイント、最も大きい中学数学Bでは18.6ポイントも開いた。

若者のスマホ事情に詳しい竹内和雄兵庫県立大准教授は「学習時間が少なくなるだけでなく、学習中にも

メールを気にするなどの問題もある。スマホ所有者は自分の学力に自信がない傾向も強い」と話す。

保護者が午後9時以降、スマホを預かるよう求めた愛知県刈谷市などの例もあるが、「友達との関係もあ

り、個人の意志や保護者らの強制だけでは防ぎきれない」と指摘。「子供側にも危機感はある。大人を交えて子供がよく話し合い、自主的にルールを作るしかない」とした。

釧路新聞 9.1 より

株式会社NTTドコモは3月28日、歩きながらスマートフォンを操作する「歩きスマホ」による事故防止とマナー向上の取り組みの一環として、「全員歩きスマホin渋谷スクランブル交差点-もしもスクランブル交差点を横断する人が全員歩きスマホだったら?」をYouTube上で公開した。

演算シミュレーションを用いて、渋谷スクランブル交差点を渡る1500人が歩きスマホをしたらどうなるのかを3D CGアニメーションで再現。愛知工科大学工学部の小塚一宏教授の研究結果に基づき、歩きスマホ中は通常の歩行時と比べて視野が20分の1になり、歩く速さも7割程度になるという、非常に危険な状態にあることがわかった。

この想定で、他の歩行者にぶつかった場合にとる行動を「あやまる」「スマホを落とす」「倒れる」の3通りとした。

シミュレーションの映像では、他の歩行者とぶつかり転倒する人や、あやまろうとしてさらに別の歩行者にぶつかる人が続出し、その結果、信号が青の間に横断に成功したのは、1500人中の547人だったという。

車を運転しながら、自転車に乗りながら携帯やスマホどこでも見られます。事故も起きています。なぜ罰則をつくらないのか不思議。私も最近スマホを持ちましたが普段は電源が入っていません。便利なのは分かりますが小中学生には？です。